

「野球と棒球」——白球がつなぐ日台百年史（中篇）

ジャーナリスト、大東文化大学特任教授 野嶋 剛

●コロナ時代に特別な意味を持つ野球

「交流」3月号に掲載された「前篇」を受けて、今回は「中篇」となるわけだが、現時点で、新型コロナウイルスの感染拡大によって本論のテーマである野球も甚大な影響を受けている。

日本では、高校野球については、春の選抜大会が中止になったことにつづいて、夏の選手権大会も中止に追い込まれた。大げさでなく、高校生活を犠牲にして甲子園出場を目標に野球に取り組んだ若者たちの心理を想像するといたまれな気持ちになる。プロ野球についても、無観客という条件つきではあるが、6月中旬の開催がようやく固まったが、例年よりも大幅な試合数の減少は避けられない。プロ野球選手の感染報告も起きている。

台湾については、新型コロナに対する厳格な水際対策と徹底した隔離などによって感染を押しえ込んだおかげで、プロ野球は4月12日に「世界で最も早い」といわれる開幕戦を迎えることになり、最初は無観客試合だったが、5月から1000人、2000人と観客を増やしていき、6月7日からは人数制限を廃止して、人と人の距離を1メートル空けることを条件に、通常入場に戻すことになった。世界的にみても、群を抜いて感染を押しえ込んでいる台湾ならではのことが、ほかのスポーツも野球同様に新型コロナの深刻な打撃を受けていることは言うまでもない。それでも野球の「復活」がここまで注目されるのは、野球というスポーツが日本と台湾で持っている社会性を物語っているように思える。それは人気があるという一言では片付けられない、歴史と深く紐づけられた「国民統合」の象徴だからではないかと考えられる。

台湾社会はプロ野球の開幕と段階的な緩和が決まるたびに湧き上がった。日本でも、野球選手の感染が報じられると、トップニュースで扱われる。この野球というスポーツの存在の大きさについて、日台とも対照的な形ではあるが、改めて見つけた形となった。やはり野球は、日本と台湾にとっては、特別な意味を持つスポーツなのである。本論の趣旨も、日台双方に重なる野球交流の歴史を掘り下げながら、特に日台関係における戦前から戦後への継承と発展という観点で光を当てようとするものになっている。

本来であれば、この「交流」の6月号が刊行されてまもなくすると、東京五輪が開催され、日本も台湾も3大会ぶりに競技種目に入った野球において代表チームの勝敗に一喜一憂する日が待っているはずだった。

五輪において、日本は正式種目になる前の1984年のロサンゼルス五輪で金メダルを獲得して以来、優勝から遠ざかっている。台湾はその1984年で3位に入った。そのとき、台湾は日本と準決勝で対戦し、のちのちまで語り草となるような接戦となった末に、日本が延長戦で劇的なサヨナラ勝ちをした。1992年のバルセロナ五輪では台湾チームは準優勝に輝いている。優勝は一度もない。バルセロナ五輪以降、四度の五輪で台湾は予選敗退、予選敗退、五位、五位と成績はふるっておらず、今回の東京五輪には最強チームを送り込むべき準備をしていると伝えられていた。五輪では、日本と台湾はいつも熱戦が繰り広げられるので、観客も日台対決を楽しみにしている。日韓戦のような重苦しさはなく、お互いの健闘をたたえながら試合を楽しめるのも日台戦のいいところだ。

●戦後台湾で野球は冬の時期へ

「前篇」では、野球が日本経由で伝来した戦前の台湾において、花蓮で頭角を表した能高団という原住民の若者たちによる野球チームが日本遠征で活躍したところ、優秀な選手たちが日本にスカウトされ、京都の平安中（現在の龍谷大平安）が学生野球界の名門にのしあがっていくなかで、その中心選手として大活躍したことを紹介した。その平安中のライバルとなった愛媛の松山商を育てた近藤兵太郎監督が台湾に渡って、まったくの無名校であった嘉義農林を甲子園出場、準優勝の快挙に導くことになった。その近藤監督のもとで、台湾の原住民選手たちがやはり活躍して甲子園で暴れ回った。

能高団から平安中へ、平安中から松山商、そして、松山商から嘉義農林へという形で、日台をつなぐ野球の絆が形成されたと同時に、台湾のなかでは、「身体能力が野球に向いている」と信じられていた原住民選手の活躍が、花蓮・能高団から嘉義農林へ引き継がれていることがわかった。

そして、終戦を迎え、近藤兵太郎ら台湾野球を引っ張った日本人指導者も日本に引き揚げ、中華民国統治下の台湾野球は新しい時代に入った。

日本では、戦前から野球が国民的スポーツとしての地位を確立していた。その影響で、野球の普及は台湾においても非常にスムーズに進んだと言えるだろう。集団性を重んじる日本で野球は人間教育のなかの武士道的要素を取り込んだものとして台湾に伝わり、台湾でも、現地社会に対する教育の普及において活用されていった。当初は日本人のスポーツであった野球に台湾社会が親しんでいくことで、台湾の人々と日本人の結節点となる部分も生まれ、日本の台湾統治の統合性を高める作用を発揮したと言えるだろう。

一方、中国では戦前、野球はほとんど普及しておらず、中国と台湾との間で野球をめぐる温度差

は大きくかけ離れることになった。最大の変化はまず、「野球」から「棒球」への名称の変更であろう。それでも台湾で根付いた野球熱は衰えておらず、1946年に第一回台湾省棒球大会が開催され、台湾全土から多くのチームが参加した。最終的に澎湖代表チームが高雄チームを破って優勝したが、台北の球場は観客にうめつくされたと言われる。1948年には中国・上海で開かれた「全国運動会」の野球部門に、台湾チームが初めて海を越えて参加した。そこで台湾チームはあっさり優勝を飾ることになり、台湾野球のレベルが中国のそれを大きく凌いでいることを示した。当時この大会に出場したのが台湾チーム、上海チーム、空軍チーム、警察チームなどの数チームにすぎず、しかも、台湾チーム以外にも、各チームには戦後中国に渡ったり、戦前から中国に滞在していたりした台湾出身者が数多く含まれていたという。

ただ、1947年の二二八事件や1949年の四六事件などを経て、台湾では次第に学生野球界のなかで部活動として野球を楽しむ雰囲気は薄れていった。さらに、一九四九年の国民党の台湾撤退によって100万人とも150万人ともいわれる外省人が台湾に流入した結果、「省籍」によって台湾のスポーツも分断されることになる。

中国では戦前からバスケットボールが盛んで、その流行が台湾にも持ち込まれることになった。中国から渡ってきた外省人が多く住み着いた台北などではバスケットボールの練習場が優先的に整備され、国際大会でも優秀な成績を収める。一方、野球については、本省人は依然として趣味として続けていたものの、学校などでは野球ができるグラウンドは削られ、日本人の帰国で野球を指導できる教員の数もが一気に減ってしまったため、全体として野球はバスケットボールなど他のスポーツの影に隠れて目立たない存在になった。

その中で生まれたのは「本省人は野球を好み、外省人はバスケットボースを好む」という言葉だった。スポーツにおける見えない省籍の境界線

は、野球にも及んでおり、それが解消されるのは、20年近くを待たなければならなかった。それが本論で紹介する紅葉小学校野球チームの勝利や国際大会における台湾代表チームの活躍だった。

●台湾代表のフィリピン派遣

その冬の時代のなかで、台湾野球の中心を担っていたのは、嘉義農林で近藤兵太郎監督に鍛えられた選手たちだったことは当然と言えるだろう。戦前の高校野球界で、台北などのチームは日本人選手が中心で、漢人・原住民の選手たちを系統的に育成していたチームは限られていたからだ。

そのことは1951年にフィリピンに派遣された台湾の戦後初めての海外遠征試合のメンバーを見ればわかる。1949年に中国共産党は中華人民共和国の建国を宣言し、蒋介石率いる国民党は台湾に撤退した。その時代の切り替わりにフィリピンで国際試合が開かれた。当時のフィリピンは米国から独立して5年しか経っていなかったが、もともと米国の影響で野球が国民的スポーツとして盛んであった。戦前の日本チームがフィリピンチームに敗れたほどで、レベルも高かった。当時のフィリピンは親米政権で、台湾も米国の支援を受けている関係でアジアにおける反共国家間の友好が形成されており、そうした国際情勢を受けて台湾とフィリピンとの間で野球交流が組まれた形だった。

初めて結成された野球の「中華民国代表チーム」は、台湾全土から優秀な選手を集める形で作られた。当時「隊長」と呼ばれた監督を務めたのは薛永順という、戦前の日本プロ野球でも活躍した元選手だった。薛永順を助けて指導員という立場でチームづくりにあたったのが李詩計という嘉義農林野球部の初代メンバーの一人で、甲子園にこそ出場していないが、戦前は横浜高専でもプレーしていた。

代表選手のなかで投手には、嘉義農林の元エー

スでアンダースローの「怪投手」として甲子園のスタンドを沸かせた東公文（このときは藍徳明に改名）が選ばれている。当時はすでに35歳になっていた。もう一人は同じく嘉義農林出身の林換洲。このときは29歳だった。投手の最後の一人は漢民族の蔡炳昌という投手で、当時28歳で台湾を代表する投手として知られていた。つまり投手3人のうち、2人は嘉義農林の選手だった。

キャッチャーに選ばれた柳盛遠の戦前の日本名は馬越で、嘉義農林でも四番を任されていた。当時は31歳で嘉南銀行に務めていた。ファーストも嘉義農林出身の楊元雄。外野手として甲子園にも出場したことがあった。ショートを務めたのは郭光也。彼も嘉義農林から甲子園への出場経験を持っていた。台東出身の原住民・アミ族で、当時は33歳。郭光也は、こののち、台湾の野球継承のなかで非常に重要な役割を果たすことになる人物である。

外野手にも二人の嘉義農林の選手がいた。劉正雄は俊足、好打の好選手で、このナショナルチームでも中軸を任された。当時は28歳。南信彦という嘉義農林出身のアミ族の選手もいた。当時は39歳に達していた。

このように見ればわかるように、初代代表チームでも主力選手の大半が、嘉義農林の出身選手で占められており、しかも、そのなかには原住民選手も相当数が含まれていた。チーム全体の平均年齢が高かったのは、台湾が激変の時代に巻き込まれた1940年代は若者に対して野球選手の育成がままならず、基本的には、1930年代の台湾高校野球が盛んだった時代に鍛えられた選手たちを中心に人選するしかなかった。台湾でも1950年になると、ぽつぽつと企業内にチームが生まれ、選手が育ち始めたが、この時点で実力主義で選ぶとなると嘉義農林出身選手たちに頼らざるを得ないのが実情だったと見られる。

●代表チームに「台湾棒球隊」の旗

中華民国体制下になって初めての野球ナショナルチームとして発足し、フィリピン遠征に備えて台中でキャンプを張って実践に備えたあと、台湾内で練習を重ねた。オール高雄チームとの練習試合には、3500人の観客が集まった。それだけ台湾の人々は本格的な野球の試合に飢えていたことが伝わってくる。

フィリピンに遠征した台湾代表チームは合計8試合を重ねて、結果は三勝四敗一引き分けだった。当時のフィリピンには代表チームというのではなく、企業チームや大学チームなどと試合を行ったのだが、最初は現地気候などにも慣れないこともあって調子が出なかったとされている。ただ、試合を重ねるごとに実力を発揮し、米極東軍のなかでも最強とされる第十三空軍チームとも戦って勝利を収めている。

台湾代表チームを悩ませたのが言語の問題だった。フィリピンでは、抗日戦争が終わってからまだ長い歳月を経たおらず、厳しい日本軍の弾圧を受けたとされる在フィリピン華僑も含めて、反日感情が強かった。そのことに懸念した台湾側は、代表チームの選手たちに対して、現地に渡ったあとは、試合や練習で日本語を使わないようにするよう指示していた。しかし、選手の大半は日本時代の教育を受けてきた人々であり、戦後の国語(中国語)教育もまだ本格的に始まっていない。閩南語を使う漢人の選手たちも、それぞれの部族ごとの言語を使う原住民の選手たちも、中国語はうまく話せないのが、チーム内のコミュニケーションは日本語が中心にならざるを得なかった。

そこでいくら中国語で表現しようとしても「貴様、何やってんだ」「もっと左」「すべれ」「カーブを狙え」などという日本式野球で慣れ親しんでいた言葉が、簡単に言い換えられるわけではない。そのため、練習をしても無言になりがちで気

合が乗らないうえ、試合になっても作戦すら伝えるににくいという問題が起きて、実力を発揮できなかったという証言も残っている。

また、台湾における政治の複雑性も、この台湾代表チームには影響が及んでいた。このチームは中華民国代表チームでありながら「台湾棒球隊」という隊旗を与えられていた。フィリピンに同行した団長はのちに副総統になる台湾出身の謝東閔で、当時は教育庁の副長官のポストとして引率役を任されていた。この隊旗に「台湾棒球隊」という文字を書いたのが当時の台湾省政府主席の呉国楨だったと言われている。米国教育を受けたリベラリストの呉国楨は国民党の若き開明的エリートとして注目されていた存在で、日本の敗戦後には上海市長に抜擢され、台湾撤退のあとは台湾省政府主席に任命されていた。

台湾省機能が凍結された現在では形骸化している台湾省政府だが、当時、台湾省政府主席は、台湾を反抗大陸の唯一の基地としている国民党権にとっては実際の台湾統治にかかわる重要なポストであり、呉国楨の前任の陳誠、後任の俞鴻鈞、その次の嚴家淦とも、台湾省主席を務めたあとは、首相格にあたる行政院長に転出している。いわば国政の中核への出世コースであったのだが、呉国楨だけは1953年にこの台湾省政府主席を退任したあとはキャリアを終えている。

積極的に国民党政府と台湾住民の関係深化をはかろうと台湾人を要職に起用した呉国楨は、1947年の二二八事件などで傷ついた台湾社会との融和を試みる政策を打ち出していたのだが、こうした姿勢が、反共による厳しい台湾統治を求めた蔣経国ら国民党中核との対立を招き、権力闘争に敗れた末に、米国へ亡命することになった。その呉国楨が残した台湾重視の姿勢が、台湾棒球隊という名称に込められていたと言えるだろう。

この隊旗の行方は今になってもわかっていないと言われている。また、呉国楨についてはさらに後日談があり、1984年に亡くなった呉国楨の伝記

を書こうとしていた米国在住の華人作家・江南が、同年、国民党政権から米国に派遣された暴力団関係者の刺客によって殺害される事件が起きた。いわゆる江南事件である。FBIも捜査に乗り出し、江南事件の背後に台湾当局が関係していたことが米国政府の知るところとなり、当時の蔣経国政権に対して米国からの民主化圧力がかかる原因となった。結果として、1987年の戒厳令の解除、本省人の李登輝に対する後継指名など民主化の道筋となった事件として知られている。台湾棒球隊の隊旗の一件だけで、台湾史の連続性が見えてくる。

●台東につながった嘉義農林のDNA

さて野球に話を戻すと、こうしてフィリピン遠征で垣間見せた嘉義農林の野球の伝統も、その教えをうけた者たちも次第に選手としての適齢期を過ぎていくなかで、低迷期に入った台湾野球界で受け継がれる場所もなく、消え去っていくように思われた。しかし、そのDNAをひっそりと、しかし、脈々と受け継ぐ土地があった。それが台湾で最も人口密度が低く、表玄関の台北から最も遠いところにある台東だった。

多くの場合、調査のきっかけは小さな疑問から始まる。

2014年の台湾映画「KANO 1931 海の向こうの甲子園」は、日本、台湾双方で大きな反響を呼んだ。台湾の高校野球チーム嘉義農林が甲子園初出場準優勝という旋風を巻き起こした実話に基づく作品で、当然、映画にも複数の台湾原住民選手が登場する。原住民は17世紀以降に中国大陸から漢人の移民が活発化する以前に台湾にいた人々で、日本統治下の台湾では「蕃人」、のちに「高砂族」と呼ばれた。KANOは決勝で中京商に敗れたものの、「日本人、漢人、蕃人」の混成チームであることが、当時の日本社会で大きな話題になったことも描かれている。

だが、よく考えてみれば、嘉義に暮らしている

原住民は、そう多くはない。そして、嘉義農林で活躍した選手たちの多くはアミ族だったが、嘉義には平地部分には原住民はほとんどおらず、阿里山一帯にツォウ族が暮らしているが、彼らが嘉義農林のメンバーにいたという記録はない。アミ族選手の多くは台東出身者で、「野球留学」をしていたと見るべきだろう。当時、台東では学生野球に打ち込める環境がなく、運動能力に優れた学生を嘉義農林がスカウトしていた。

だが、嘉義農林で活躍した選手たちは、どこに消えたのだろうか。1951年の代表チームへの参加から、その消息はぷつぷつと途絶えている。台東で彼らの足跡をたどれば、台湾野球の伝統が断絶していなかった経緯を証明できるのではないかな。そんな考えで、私は台東へ向かった。

台東には、台北から台湾高鉄（新幹線）で高雄まで下り、南回りの台湾鉄道（在来線）で太平洋を右手に見ながら2時間ほどで着いた。飛行機で台北から飛ぶ方が速いが、亜熱帯から熱帯に変化する景色を見られる台湾半周のこのコースが私は好きだ。台東の自然の「色」は台北や高雄とはまるで違う。染みこむような海のブルーと山のグリーンに包まれた世界が眼下に広がる。

私が最初に訪れた先は、台東県でかつて県長を務めた陳建年のところだった。嘉義農林が甲子園に出場したとき、名遊撃手として名を馳せた上松耕一（陳耕元）選手の息子である。

陳耕元は1905年、台東の原住民・プユマ族の家庭に生まれた。地元の台東公学校で学んでいたが、日本人教師に運動能力を見出されて野球を覚え、1925年に嘉義農林に進んだ。この時、彼はすでに20歳である。1931年に甲子園で準優勝したときも遊撃手として出場していたが、26歳という年齢になっていた。甲子園史上最年長の「高校球児」だと言われている。当時は高校野球も年齢制限はゆるやかだった。

嘉義農林を卒業後、陳耕元は横浜高専に進学し、野球を続けた。卒業すると、台湾に戻っていくつ



「台湾紀行」の中国語版を手にする陳建年氏

かの仕事を経て、台東農業学校で野球部のコーチに就任して、そのまま終戦を迎えた。

陳建年によると、父の陳耕元は「野球の灯火は絶対に消さない」という強い信念を持っていたという。1947年に台東農業学校の校長に就任すると、地元の子供たちに私財を投じながら野球を教え続けたという。

陳建年は、実は、国民作家・司馬遼太郎が週刊朝日に連載し、1994年に刊行した名著「街道を行く 台湾紀行」のなかで、娘の陳瑩と一緒に登場している。陳瑩はいま民進党所属で原住民代表として立法委員を務めている。当時彼女は21歳で、高雄の学校で日本語を学んでいる学生だった。司馬遼太郎の筆は、陳家の人々の描写に終始していたので、野球との関わりについては踏み込んで書かれていないのが惜しい。それでも、日本の主要メディアで嘉義農林の伝統が台東の地で生きていることを伝えたのは初めてのことでなかっただろうか。ここで登場した陳瑩の主導により、祖父・陳耕元を祈念した少年野球大会「耕元杯」が2016年から台東で開催されている。陳瑩は「私が野球を愛しているのは祖父の影響です」と語っている。

陳耕元は、1958年に交通事故で亡くなった。当時、陳建年さんはまだ11歳に過ぎなかった。台東農業学校で、陳建年さんも父の教えている子供たちに混じって野球を学んだ。

「どうも私は父のように野球の才能はなかったようで途中で辞めてしまいましたが」と苦笑いしながら、「週末が練習日だったのですが、夕暮れの太陽をみながら汗を流して笑ってボールを追いかけていた記憶はずっと忘れられません」と語った。

「美しい光景で、いまでも思い出します。社会の中心が野球でした。KANO世代の人たちは野球が人生のすべて。子供たちを日本語で『ばかやろー』っていつも怒鳴りながら、わずかな収入からお金を出し合って、試合の遠征費を捻出していました」

陳耕元は、近藤兵太郎を生涯の師と仰いでいた。日本の敗戦が決まり、近藤が松山に引き揚げる直前、台東から近藤をお別れに訪ねた。陳耕元は一枚の結婚写真を近藤に渡した。近藤は生涯、その写真を手元から離さなかったという。

●動き出した KANO の OB

陳耕元が交通事故で亡くなり、台東農業学校も廃止されると、台東で子供たちが野球を続ける場所がなくなってしまった。再び、台東で野球の伝



高克武氏

統が消えかけたところで、再び動き出した人々がいた。それは野球を忘れられなかった嘉義農林のOBたちで、その中心になったのが馬蘭野球チームだった。

陳建年に続いて私は国立台東大学に足を運んだ。そこで野球部を指導している高克武という人物に会うためだった。高克武は、野球の指導者であると同時に、台湾野球の研究を行っており、馬蘭野球チームに関する論文をまとめている。嘉義農林と原住民選手たちの「その後」と戦後台湾野球をつなぐ鍵である馬蘭野球チームを解き明かす鍵がその論文に明かされていたからである。

「馬蘭野球チームは、KANOの若者たちが戦後、野球の伝統の光を灯し続けるために作ったのです」。高克武はそう切り出した。

高克武によれば、戦後の台東では、台湾銀行や教会、台湾鉄道などで働く人々は、それぞれ同好会的な形で野球を続けていたが、台東農業学校がなくなってからは、若者たちが本格的に野球に打ち込む場所はなかった。中学・高校でも指導者不足から野球部はなく、嘉義農林のOBらが台東県政府に野球部活動への支援を働きかけたが、前向きな返事はなかった。

やがて終戦から10年がすぎ、嘉義農林のOBたちもそれぞれ就職し、結婚して家庭を持ち、子供たちが野球を楽しめる年齢になっていた。成長していく子供たちに野球の技術を伝えたいと考えた彼らはとうとう自らチームを作って野球を教えようと、1964年に馬蘭野球チームを立ち上げたのである。馬蘭という名称は、台東のアミ族の集落の名前で、多くの野球選手を輩出している野球の盛んな土地である。

馬蘭野球チームの中心になったのが、前出のフィリピン遠征のナショナルチームに選ばれていた嘉義農林OBの郭文也だった。

郭文也は日本時代の名前を浜口光也といった。1919年に台東で生まれ、嘉義農林に進学した。1936年に嘉義農林が甲子園に出場したときの選

手だった。レギュラーではなく、甲子園での出場記録はない。嘉義農林を卒業後、台東に戻って就職しながら、同好会で野球を続けた。企業経営などを経て、台東県議員になり、三期の選出を経て、1956年に議員を引退し、馬蘭野球チームの成立に奔走する。郭文也は12年間にわたって馬蘭野球チームの監督を務めることになる。高克武野球自身も馬蘭野球チームのメンバーだった。

「私は、この馬蘭野球チームで、野球を覚えたのです。毎週土曜日が練習日で、日が暮れるまで、みんなで野球を楽しみました。KANOのOBの方々はそれはそれは厳しくて、きっと近藤兵太郎さん流だったのですね。サボっていたり、手を抜いたりすれば、カミナリを落とされました。野球の指導は中国語と日本語と原住民の言葉が混ざっていましたが、怒られる時は『バカヤロー』や『しっかり捕れ』『もっと早く走れ』でした。

でも、終わったあとはチームのみんなと一緒に海辺にいて食事をしたり、道具を整備したり。なんともいえない一体感がありました。本当に楽しい時間でした。野球というのは、教える人たちと教わる人たち、応援してくれる人たちが一つの家族みたいになるんです。私たち原住民は特に家族のつながりを大切にするので、こういう野球の特性がとても好きなんですね。だから台東で野球は消えなかったのです」

高克武はそんな風に当時を振り返った。

馬蘭野球チームで教えた嘉義農林のOBたちにはどんな人物がいたのだろうか。

監督の郭文也を除いて、およそ5-6名の名前が残っている。高克武の記録によると、楊吉川(日本名・吉川武揚)は1933年、1935年、1936年の三度に渡って甲子園に出場した遊撃手で名手として知られた。彼は内野守備を担当した。

フィリピン遠征のナショナルチームのメンバーだった柳盛遠(日本名・馬越蘭一)は1938年から1940年まで嘉義農林野球部に捕手として所属した。当然、捕手コーチを務めた。投手と内野を担

当したのは林清嵐（日本名・和田清）で、1942年から1943年まで嘉義農林に所属していた。それから1931年、甲子園に出場し、準優勝したときの捕手、藍徳和（東和一）も時々応援に顔を見せた。郭壯馬（日本名・浜口壯馬）も1936年の甲子園メンバーで、コーチとして顔を出していた。

●週末にトレーニング

KANOの遺伝子を引き継ぐ馬蘭野球チーム。彼らはどのようにトレーニングを積んでいたのだろうか。

高克武は、当時の練習方法について、コーチたちに聞き取りを行った。子供たちは、異なる学校、異なる地区から、野球好きが集められたため、普段、学校がある時期は平日の練習ができないので、土曜日の午後と日曜日に全日を使って練習を行った。当時の台湾は、学校が週休一日制で土曜日はお昼に学校が終わってから始まった。子供たちが練習場に集合すると、監督やコーチから練習メニューが告げられる。最初にウォーミングアップをして、キャッチボール、打撃、守備、走塁の順番にメニューをこなしていくオードソックスなもので、トレーニングのための装具はなく、バットとボール、グローブしかなかった。

郭光也監督を中心に、コーチたちは、それぞれの得意分野にしたがって技術指導を行なった。年齢も熟練度も個人差があったため、普段の練習は個別指導が中心になった。夏休み、冬休みになると、集団トレーニングもできる余裕が生まれ、まず午前中は近くの海岸線で砂浜を走ったり、山の斜面をダッシュして登ったりして基礎体力を鍛えたうえで午後に、チーム練習を行なったという。

馬蘭野球チームは台東市にある新生国民小学校のグラウンドを練習場所として行った。ただ、そこは200メートルトラックがあるだけでバッティングなどの練習がしにくいいため、別の台東県立の運動場に練習場所を移したが、スポーツ大会などの

公式行事が行われる週末には練習ができずに、近くの大きな空き地を探して練習を行なったという。もともと田畑に使っていた広い空き地が見つかったので、コーチや子供たちが一緒になって雑草を抜き、地面をならして、線を引いてグラウンドに生まれ変わらせた。ボールも資金がないので普段は軟球を使い、試合になると硬球を使った。当時の硬球は高価なので何個も買うことはできなかった。

一方で重視されたのは野球に対する精神的な教えを伝えることだった。礼儀、服装、闘志の持ち方など完全に日本の野球に則って、野球は教育の一環という形で、礼儀作法や振る舞いが厳しく教えられたという。

「みんな監督もコーチも日本教育を受けて、嘉義農林で野球を覚えた人たちでしたから、当然、日本式の野球でした。特に近藤監督の教え子たちですから厳しさは本当にすごかった。でも、当時は私たちも野球はそういうものだと思って学んでいました。試合を途中で諦めたり、全力疾走を怠ったりしたら、大目玉でした。とにかく野球は勝ち負けじゃない、最後まで戦い抜き、すべての力を出し切るにおだと、いつも口を酸っぱくして言われていました」（高克武）

●突然の紅葉チームの登場

この馬蘭野球チームが活動したのは、主に1960年代後半から1970年代前半にかけての時期だったが、まったく別のところから「野球王国・台東」の名前を知らしめる出来事が起きた。それが紅葉小野球チームの活躍だった。

台東市から花蓮に北上していくと、国道沿いの路上の「野球の故郷へようこそ」という看板が目にとまる。そこから山道に入っていくと、台東県延平郷の紅葉国民小学校がある。ブヌン族を中心とする原住民の子供たちが通っている学校で、山村の小さな学校だ。村の中には、伝説となった紅



紅葉少年野球記念館

葉小野球チームの記念館があり、多くの写真やトロフィー、野球道具が展示されている。紅葉温泉が近くにあり、温泉旅館もあったのだが、近年大雨が多くて水害が多発したため、営業をしばらく見合わせているらしい。山のなだらかな斜面に広がる美しい山村で、記念館の隣にある野球部のグラウンドが村でもっとも立派な施設だった。

奥まった山村にある小さな記念館だが、決して廃れているようには見えない。「紅葉」の名前は台湾人の記憶に深く刻まれているので、延平郷を訪れた人がつい足を向けてみたくなってしまいうらしい。私が訪ねた時も5～6人の参観客がいた。

紅葉小野球チームは10人しかいなかった。最初は欠席しがちな子供たちに学校に通う目的にしてもらうためスポーツを覚えてもらおうという学校側の考えから、希望者が集められた。もともと日本統治時代に野球をやっていた父親を持つ子供も多かった。野球を教えられる教員がたまたま転任してきたこともあり、チームが立ち上がった。手作りのボールやグラブ、バッドを使って石ころだらけのグラウンドで練習を重ねた。嘉義農林のOBが教えにきていたという話もあるのだが、私が確認したなかでは、明確な記録や証言はないので、事実かどうかは判断が今はつかない。

紅葉小はのちに「石をボールに、木をバットに」しながら苦勞して練習を重ねたと報じられ、日本

から遠征にきたリトルリーグの関西選抜チームを、圧倒的に破ったことで全国的な英雄となった。

もともと紅葉チームの活躍はメディアの報道から始まった。1967年夏、台湾で初めての全国少年野球大会が花蓮で開催された。そこで彗星のように現れた紅葉小チームは準優勝を果たす。だが、所詮は小学校野球。しかも、当時の台湾で野球はまだマイナーなスポーツ扱いで、プロ野球もなく、ノンプロ野球がひっそりと大会を開催しているぐらいで、ほとんど注目を集めなかった。

翌1968年の全国少年野球大会は台北開催だった。紅葉小チームが注目されたきっかけは一つの報道だった。紅葉小チームは、実力がありながら、台北に行くための経費がないので、大会に参加できないだろうという小さな記事が、台湾の日刊紙「聯合報」に掲載されていた。

たまたまその記事を目にした「王子」という少年向け雑誌を出している出版社の社長・蔡焜霖は、どうにか紅葉小の子供たちを台北に招きたいと考えたが、雑誌経営も決して楽ではない。反対する部下たちも多かった。しかし、「彼ら少年たちは私の雑誌の読者だ。もしも助けの手を差し伸べなかったら、誰が助けるというのだ」と説得し、紅葉小学校の校長に手紙を送った。そこには「出版社の運送社で台北まで少年たちを運ぶことができます。夜は静かな倉庫で眠ってもらえる。食事、社員たちが三食とも用意することができます。決して少年たちにとって居心地の良い方法とはいえませんが、もしそれでよければ大会参加を検討してもらいたい」と書いた。

校長からすぐに返事が届いた。

「ぜひお願いしたい。感動しました。ご恩に報いるために絶対に優勝します」

大会に参加すると、台東の山村からやってきたチームへの関心は、ますます高まった。出版社の支援を受けている話も含めて、注目のチームとなり、大会でも勝ち進み、決勝へ進出。対戦相手に



紅葉チーム

なったのは嘉義農林のあった嘉義からやってきた垂楊小のチームだった。試合は接戦となり、最終回の7回まで0対0だったが、7回裏二死から紅葉チームのサヨナラ本塁打で勝利をもぎとった。劇的な結果を翌日の新聞が大きく報じた。

紅葉チームの伝説はさらに続いた。この年、台湾には、日本から関西リトルリーグの選抜チームが訪問することになっていた。どういうわけか、当時の台湾メディアはそろって「和歌山チーム」と報じており、台湾人の誰もがそう信じていた。和歌山チームは確かにその年に米国で開かれた世界大会で優勝している。だが、関西選抜チームのなかには一部のメンバーが含まれているだけだった。意図的か、そうでなかったかは、現在までわかっていない。

関西選抜チームとの試合は、全国少年野球大会の準優勝チームである垂楊小チームが最初に戦って敗れた。次に優勝チームの紅葉小チームが対戦し、7対0で勝利を収めた。後日行われた二度目の試合でも勝利し、紅葉小チームの実力により、台湾全体が熱狂した。政府をあげて紅葉小チームを称賛するようになり、台湾の少年野球は世界レベルにあることに期待が広がった。

ところが、紅葉小チームの名声は頂点からあっという間に色あせていく。チームの人数を満たすために複数の選手が少年野球の年齢を超えていた

ことが発覚し、予定されていた海外遠征の話は取り消しになってしまった。さらに、石をボールに、木をバットに、という話は事実と相違していたことがわかった。当時の校長や教員は処分され、紅葉の功績はいったん地に落ちることになり、元選手や教員たちも語ろうとしない時代が続いた。しかし、時代の経過とともに、彼らも周囲の大きな期待に巻き込まれ、事実を伝えようとしても握りつぶされたりしていたこともわかり、被害者としての苦しさも理解されるようになり、再び紅葉小チームへの暖かい視線は戻ってきている。ただ、当時小学生だった選手たちの多くが、若くして事故や病気で死去していることもあり、原住民の人々の生活の苦しさを印象付けることになった。

台湾野球史的にみれば、紅葉小チームの活躍は一つの転換点となる重要な出来事であることは間違いない。

当時、台湾は、国際社会で孤立を深めていた。中華人民共和国の外交攻勢にさらされ、国連のメンバーシップや主要国との外交関係も風前の灯になっていた。その停滞ムードを吹き飛ばす快事として、紅葉小チームの活躍は、台湾の人々の一服の清涼剤になったからだ。

加えて、台湾では前述のようにバスケットボールなど大陸出身の人々が好むスポーツの活躍が目立っていたが、日本統治時代から慣れ親しんだ野球については、世界的な強国になれるとは台湾自身も思っていなかった。ところが、紅葉小チームの活躍でもともと社会の底流で人々が共同記憶を持っていた野球のブームに火がつくのは速く、台湾では一大少年野球ブームが起きた。加えて、大陸反抗を掲げながら実現できないまま、中華民国体制への信頼が台湾社会で揺らぐことを恐れていた国民党政府は、この少年野球ブームに目を止めた。政府の支援のもとで台湾大会を勝ち抜いたチームを世界大会に派遣するプロジェクトが動き出したのである。

そのなかで最初の少年野球界のスターとした台

頭したのは、紅葉小のメンバーではなく、同じ台東県で嘉義農林の選手たちから教えを受けていた郭源治だった。郭源治はのちに中日ドラゴンズのエース格として活躍することになる。

●郭源治を育てた嘉義農林 OB

馬蘭野球チームで野球を学んだ子供たちは次第に成人し、今度台東各地の学校で野球の指導者となる者が次々と現れた。

例えば、高克武はその後、成功商水や台東体育中学、新生国中で教えて、現在の台東大学の監督になっている。馬蘭野球チームの監督を務めた郭文也には、郭子雄と郭子光という二人の息子がいたが、どちらも馬蘭野球チームで野球を覚えて、その後、台東少年野球界の野球指導者になっている。彼らが散って行った台東各地の中学では、本格的指導を受けた子供たちが台湾プロ野球の選手として今日活躍しているケースが非常に多い。高克武自身も、指導者生活のなかで、20人以上のプロ野球選手を育てているという。

郭文也の息子、郭子光が教えていた豊年国民小学の野球チームのなかで、ひととき強い肉体とガッツを持っている子供がいた。それが、先述の中日ドラゴンズで活躍した郭源治である。

農村で育った郭源治の家庭は貧しく、零細農家だった。父は日本教育を受け、田んぼの農作業の休憩の合間に裸足で練習する郭源治に野球を教えた。両親を貧困から野球によって引き上げたい。それが郭源治の原動力であり、幸い、台東には野球に打ち込む環境が整っていた。

「アミ族は勉強で漢人に勝てない。成功には野球が一番の近道だった。でも、本当に縁ですよ。お父さんが野球を日本時代にやっていなかったら、そして、KANOの人たちがいなければ、私は野球がこれほど上達しなかった」

そう振り返る郭源治は豊年国民小学校からスカウトされて台中の金龍中学校に進学。エースと

なって1969年のリトルリーグの世界大会に出場し、優勝するという快挙を成し遂げる。その後、台湾代表のチームは世界大会での優勝を重ねていく。

●陽岱鋼ら陽家三兄弟も

その郭源治に憧れて野球を始めたという陽介仁という人物にも台東で会うことができた。待ち合わせたのは台東市内の野球場だった。この野球場は、前出の陳建年さんが、台東県長時代に予算を計上して建設したものだ。その野球場で陽介仁さんは子供たちに野球を教えていた。陽介仁はアミ族で、日本プロ野球の読売巨人ジャイアンツに所属している陽岱鋼選手の叔父にあたる。

「アミ族は漢人に比べて、弱く、貧しい、と子供心に信じていたのに、郭源治は世界で大活躍した。彼のようになりたいと思いました」

陽介仁は高校、大学で野球特待生となり、アンダースローの投手として日本のノンプロで活躍した。ある年、陽介仁がオフシーズンで台東に戻ると、兄の息子で、小学生三年生だった陽岱鋼が真剣な眼差しで、問いかけてきた。

「おじさん、野球を教えて。おじさんみたいに日本で野球がしたい」

陽介仁はこう答えた。



陽介仁

「野球の練習はつらいぞ。簡単にできるものじゃない。テストをしよう。キャッチボールでボールを一度も落とさなかったら合格だ」

陽介仁は最初軽くボールを投げたが、陽岱鋼があまりに簡単に捕球してしまうので、次第に力を入れて投げたが、一球も落とさなかった。

「才能がある、と思いましたね。それから岱鋼は学校が終わると午後に家に帰って、ずっと日が暮れるまで壁にボールを投げているのです。この子は『有信仰的孩子（信念の強い子）』だと確信しました。今日の活躍は不思議ではありません」

子供のころから優れた選手であった兄弟たち以上に、陽岱鋼は素早く頭角を現した。抜群の運動神経。足の速さ。目の良さ。何より、周囲に「棒球小博士（少年野球博士）」と呼ばれるほど野球に精通し、どんなポジションでもこなした。

台東でその才能が知られるようになった陽岱鋼は、当時、台湾選手に目をつけて日本留学を積極的に進めていた福岡第一高校にスカウトされ、高校時代に39本塁打の記録を残した。ドラフト一位で日本ハムに入団し、俊足で守備もよく、一発もあるという走攻守そろった選手としてスターになり、大型FAで巨人に入団した。いわば台湾選手のなかで目下のところ、日本での「出世頭」となっている。残念ながら、巨人入団後はまだ十分に実力を発揮しているとは言えない。

この陽岱鋼には、二人の兄がいた。のちにソフトバンクで投手として所属し、現在台湾プロ野球で打者に転じた陽耀勳と日本の独立リーグなどに所属した陽品華（陽耀華から改名）である。

陽耀勳は陽家三兄弟の長男で、左投げの投手。145キロを超える速球の多彩な変化球が武器だった。小学校までは地元台東でプレーし、中学校から台北に野球留学し、そのまま中国文化大学に入学。若くして台湾のナショナルチームにも選ばれるなど将来を嘱望され、福岡ダイエーホークスに入団した。貴重な左腕として期待されながら、制球難に苦しみ、怪我にも泣かされ、思ったように

活躍できないまま、米球界に挑戦するも失敗。2012年から台湾に戻り、ラミーゴという球団で野手に転向して2019年までプレーを続けている。

次男の陽品華は俊足巧打の内野手で、福岡第一高校へ野球留学し、投手もできる好選手として注目を集める。福岡経済大学に進学。怪我もあって、プロ入り志願をしていたが果たせず、日本の独立リーグでプレーを続けた。2015年から台湾のノンプロ野球に所属し、現在は引退している。

ほかにも、陽家関係者で日本野球に関わっている人物は多い。オリックスに所属している張奕は、陽岱鋼らと同じ福岡第一高校に入学し、投打にわたって活躍を見せる。その後、日本経済大学を経て、2016年の育成ドラフト1巡目でオリックスから指名を受けた。当初は野手としての入団だったが期待に応えられず、2018年に投手に転向した。普通、投手から野手への転向は多いが、野手から投手へは珍しい。

それでも持ち前の運動能力を発揮してみるみる成長し、150キロ代のストレートを投げ込むほどに成長した。2018年に二軍で5試合に登板してわずか1失点、防御率1.80という好成績を残し、翌2019年も6試合で1勝1敗、防御率2.03と好調だったことから5月に一軍入り。公式戦でプロ初勝利も経験し、2020年には若手随一の有望株として飛躍が期待されている。

陽家出身者はほかにも台湾のプロ野球界で活躍した選手が多く、台湾では「陽家班（陽家ファミリー軍団）」と呼ばれており、台湾野球界における台東勢力の強さを示す象徴的な存在になっている。彼らも源流を辿っていけば、馬蘭野球チーム、それを育てた嘉義農林にたどりつくのだ。

●第一世代から第四世代まで

戦後、大陸からきた国民党政府は、サッカーやバスケットボールに力を入れ、野球は忘れ去られる危機にあったが、野球は廃れなかった。その灯

をひっそりと台東で守り続けたのが嘉義農林野球部出身者だった。

彼ら KANO「第一世代」や彼らの教え子「第二世代」が育てた郭源治ら「第三世代」は少年野球国際大会で大活躍する。陽岱鋼はその次の「第四世代」にあたる。世代を超えて、台湾の原住民社会で、花蓮の能高団から始まった野球の伝統が継承され続け、その選手たちが日本にも進出するなど、日台の野球交流は続いている。

2016年時点で台湾のプロ野球選手213人のなかで、原住民の占める割合はなんと77人（36%）に達する。しかも年々増えているのだ。（注5：2000年は17%、2010年は26%。2016年の77人の原住民選手のうちアミ族は65人を占め、圧倒的多数だ。当然、台東など東海岸出身者がことのほか多い。

この異常な比率は、日本が伝えた野球が、原住民のアミ族社会を中心に芽吹き、能高団や KANO、台東の少年野球などで脈々と引き継がれ、成長を続けていることを意味している。台湾は戦前戦後を通して優れた選手を日本に送り込み、彼らが持ち帰ったものがさらに台湾野球を豊かにしてきた。

近代において「戦争」と「統治」で交わった日本と台湾の運命が、野球という橋梁を通して、いまなおつながる姿がそこにある。台湾では戦後、野球を「棒球」と呼ぶようになったが、そこにあるのは、まぎれもない日本の「野球」の原型にも思える。我々の時代にも続く陽岱鋼や郭源治らの活躍は、百年という遠い過去に台湾の土地に種が蒔かれていたのだ。（文中敬称略）